

■ 「今時の文献管理ツール」ワークショップに参加して

林 賢紀 (はやし たかのり/農林水産研究情報総合センター)

2011年12月6日(火)に国立情報学研究所にて開催された第2回SPARC Japanセミナー「今時の文献管理ツール」ワークショップに参加する機会を得た。本ワークショップでは、既に多くの研究者に利用されているEndNote、RefWorksといった文献管理ツールのほか、ソーシャルネットワーク機能を取り込み急激な成長を遂げたMendeleyや、医学生物分野に特化しPubMedとの連携や論文推薦までをサポートするTogoDoc、合わせて4つのツールを同じ場で比較できる貴重な機会となった。

発表資料や当日のビデオ映像、またアンケートの回答がSPARC JapanのWebサイトで公開されている¹ため、本稿では各ツールの詳細に言及することは避け、発表や質疑を元にした所感などを述べたい。また、筆者を含め当日会場で聴講していた者による会議の様子のTwitter発言のまとめ²も参考にされたい。

ワークショップは、各ツールの説明と、使い比べを目的としたディスカッション「実際の文献管理で各ツールを使ってみる」の2部で構成され、特にCEOであるDr. Victor Henningが来日し、自ら紹介を行ったMendeleyに注目が集まった。

個々に文献管理ツールを見たとき、ありきたりの結論としては「時と場合に応じて使い分ける」となるだろうか。文献データベースを検索しその書誌情報を取り込んで管理し、執筆する論文の引用文献リストに指定の書式で出力する、という文献管理ツールにとって基本的な機能はどれも変わらない。また、相互に書誌情報を標準的な形式のファイルで交換することもできる。その他、有償か無償か、あるいはデスクトップ上にインストールするアプリケーションか、Webのみで利用できるのかなど、機能やインターフェースの差違が、文献管理ツールの一般的な選択要素となるだろう。

しかし、筆者に衝撃を与えたのは、機能比較の質問に対するDr. Henningから発せられた「大事なのは機能ではなく、使っていて楽しいかどうかだ。MendeleyはResearcherにとって、使っていて楽しいツールであり情報共有を簡単にするものである」という言葉である。

研究テーマの多様化・複雑化は、他分野の研究者との共

同研究を必要としている。Thomson Reutersは保有する膨大な学術文献情報を元に、ResearcherIDに見られる自著の公開と研究者間のコミュニティツールを持ち、RefWorksは文献共有機能を有する。現在は、文献管理から共有、そしてコミュニケーションツールへの進化の過程である、と言えるだろう。蓄積した文献のメタデータなどから利用者同士を結びつけ、ソーシャルネットワークの構築を可能にしたのがMendeleyである。また、TogoDocは精度の高い論文推薦機能により関連する著者の発見を容易にし、結果としてコミュニケーションに繋げることができる。一頃流行したWeb2.0の文脈で言えば、「集合知」の集積によるサービスとも言えるだろう。

このように、いずれのツールも論文管理による研究の効率化を起点としており、その目指す先には、アプローチは異なるがコラボレーションや情報共有などの研究開発に必要な根本的な活動をデジタル化により支援する、という新たな概念が見えてくる。ここで一歩リードしているのはMendeleyやTogoDocと言えるが、運用実績やサポートなどの側面からは、使い慣れたEndNoteやRefWorksは捨てがたく、手放せないものであるだろう。そこで重視されるものは何か。多機能性より「日常使っていて楽しい」要素の重視は、国内における国産スマートフォンとiPhoneとの違いを彷彿とさせる。

学術研究の分野においても、集合知やこのような概念が入り込んできたことへの驚きと、研究活動においてはどちらが優先されるのか、サービスを提供する側である図書館員として新たな課題を課せられたワークショップであった。



※ 参考文献

1. SPARC Japan. “2011年度 第2回「今後の文献管理ツール」ワークショップ”. 国立情報学研究所.
<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2011/20111206.html> (参照 2012-01-23)
2. tzhaya. “第2回 SPARC Japanセミナー 2011「今時の文献管理ツール」ワークショップまとめ”. <http://togetter.com/li/224136> (参照 2012-01-23)